

『伊勢物語秘訣抄』について：延宝期の古典享受

田中，葉子
九州大学大学院（博士課程）

樫澤，葉子
九州大学大学院（博士課程）

<https://doi.org/10.15017/11925>

出版情報：語文研究. 68, pp.26-40, 1989-12-15. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

『伊勢物語秘訣抄』について

—延宝期の古典享受—

田 中 葉 子

—

此抄はあるやんごとなき息女伊勢物語を学給へんとて諸抄をあつめ御覽すれども其義理あらはれがたくして抄も猶むつかしく聞えがたければさあらハ此諸抄を講釈のごとくにかきしるしてまいらせよとの御所望にて有ければ伊勢物語のよみくせ井ならひ口傳をものこらず講釈の詞にてかきしるし侍る事になりぬ(註)
(後略)

という序をもつ、『伊勢物語秘訣抄』という注釈書がある。本書は延宝七年刊で、『闕疑抄』・『拾穂抄』などのように正統的とは言えないものの、いわゆる旧注に属する、『伊勢物語』の注釈書である。

『伊勢物語』注釈書研究のまとまったものとしては、夙に、大津有一氏『伊勢物語古註釈の研究』(昭29・3)があるが、『秘訣抄』については、次のように言う。

ところがこの秘訣抄と非常に似たものに伊勢物語器水抄のあることを私は注意したい。(中略)かやうに初段でもむかし、おと

この両条では器水抄の一部分を取つて、少し文章も変へてゐるが、うるかうぶりしてに至ると殆ど器水抄と一致してゐる。従つて秘訣抄は器水抄に少し手を入れたものと断定してよいと思ふ。

つまり、大津氏は、『秘訣抄』と関係の深い、『器水抄』なる注釈書を指摘したのであるが、一方、その『器水抄』については、

集註所引の乗阿の説即ち師云を抄云として引用して居り、公条や実澄の説それから九禪抄などは集註と同じく載せてゐる。従つて集註との間に直接か間接か知らぬが深い関係の存することとは認めなければなるまい。直接の関係といつたのは一華堂乗阿の註釈から器水抄それから集註といふ一連の関係を意味するのであるし、間接とすれば、乗阿の註を器水抄と集註のそれぞれが継承した場合を指すのである。

と述べる。結局、大津氏が注目したのは、『器水抄』と『秘訣抄』、『器水抄』と『伊勢物語集註』、更に、「要するに、抒海は、集註をそのまゝとは云へぬにしても、略襲用したもの」という『集註』と『伊勢物語抒海』の、それぞれかなり近い関係であった。

慶長13 (一六〇八) 『器水抄』成(跋)

慶安5 (一六五二) 『伊勢物語集註』刊

承応4 (一六五五) 『伊勢物語抒海』成(跋)

延宝5 (一六七七) 『徒然草大全』刊

延宝7 (一六七九) 『伊勢物語秘訣抄』刊

延宝8 (一六八〇) 『伊勢物語拾穂抄』刊

元禄5 (一六九二) 『勢語臆断』成(跋)

『器水抄』は、蓬左文庫に唯一蔵される写本で、慶長十三年の跋文を有する。大本十一冊、著者は不明^(註2)。

『伊勢物語集註』は、大本十二冊、慶安五年刊の板本であり、一華堂切臨が、自らの師である乗阿の説を中心に編んだもの。

『伊勢物語抒海』は、浅井了意の著で、大本十冊の板本、承応四年の跋文がある。

さて、その後、田中宗作氏は『伊勢物語研究史の研究』(昭40・10)において、諸注集成的な傾向の著しい注釈書として、これら四書を検討し、

(1) 秘訣抄の注は、その大部分が器水抄によるものである。

(2) 抒海の注は、その大部分が集註を襲用し、これに増補の手を入れたものである。

と推定し、また、(1)の二書と(2)の二書は、相互に深い関係があることを確認した。

これらはいずれも、諸抄を集大成させた形の、大部な注釈書である。こうした類のものであるので、記述が多く重なり合うことは当然とも言えるが、文章の細部まで酷似するこの四書に密接な関係のあること、これが従来から言われる、『秘訣抄』に関する特徴の第一

である。

また、『秘訣抄』の特徴の第二として、

詞いやしくながくしきは愚なる女中のため誰もしるしめずべきと覚ゆるほどの事にも注釈し侍るハ此物語の初心の人の手引也然といへとも予が愚意を尠まぢへず先達の諸抄を詞になをすのミなれば名付て秘訣講釈抄と題し侍るならし

という序の記述などから、婦女童蒙向けの著述を意識した点もあげられている(田中氏、前掲書)。

本稿では、『秘訣抄』について考察するに当たり、了意の『抒海』は『集註』を踏襲していることが既に明らかにされているので、これは一旦除外し、他の二書、すなわち『器水抄』・『集註』という同系統の注釈書と『秘訣抄』との比較検討を行ない、その上で、『秘訣抄』の特徴・意義について考えたいと思う。

二

さて、『秘訣抄』には、著者名としては何の記載もなく、自序らしきものがあるものの、それに付される署名もない。だが、巻一の「当流正意とする諸抄」のあと、左下すみに「高田宗賢集」とあり、これによって、『秘訣抄』の著者は、従来、高田宗賢とされてきた。ところが、この高田宗賢自体、伝記が判然としない。大津有一氏も前掲書で、

高田宗賢の伝記は明かでない。国文学研究史では彼の著書として延宝五年刊の徒然草大全を挙げてゐる。

とのみ触れる。高田宗賢の著書としては、右のように、他に『徒然

草大全（十三卷十三冊、延宝五年刊）が知られるが、本書は『秘訣抄』と同じく、『徒然草』における諸抄の注を集めた注釈書である。

この『大全』も『秘訣抄』と同様、著者名とおぼしきものは、尾題「つれく草抄全部」の下に「高田宗賢」とあるのみである。

さて、この宗賢について、富倉徳次郎氏は『国語国文学研究史大成6・枕草子・徒然草』（昭35・1）の「研究史通観・近世」の中で、『徒然草大全』は、延宝五年刊、高田宗賢の著である。宗賢は

山崎闇斎（一六八八）門下の学者である。と述べている。

また、『国書総目録』によって、高田宗賢の著書を検索すると、

高田宗賢（正方・未白）

伊勢物語秘訣抄 延宝七刊（宗賢）

古語拾遺示蒙節解 宝永四（未白）

神武紀八首和歌抄 元禄二一（正方）

徒然草大全 延宝六刊（宗賢）

中臣祓清明抄（未白）

とあり、前記二書の他にも、未白、正方の名で著したものが存在することが知られた。

その一つ、『古語拾遺示蒙節解』には、宝永六年、巖崎守齋が記した序が、自序と共に載るが、それには以下のように述べられる。

後備高田未白翁從學于垂加先生之門純勤精究用力神道有年矣（中略）抑聞昔者廣成之著是書歲方八旬而今日白翁之作此解高齡亦方同年

この記述に拠れば、著者高田未白は、備後の人で崎門の学者であり、しかも、この序が書かれた宝永六年には、既に八十歳の老齢であっ

たことがわかる。

このことを裏付けるものとして、猪原薫一氏「高田未白」（伝記）9巻12号、昭17・12）に紹介される、備後鞆の勝音寺に存する未白の墓がある。これには「高田未白正方墓／忠巖義孝信士／正徳五乙未天十二月十四日」と記されているらしく、歿年が明らかである。

享年は不明であるが、猪原氏が言う如く、『崎門学脈系譜』などを参照して八十六歳とすれば、前述した『古語拾遺示蒙節解』の序の記述とも合い、これに間違いないと思われる。

よって、『秘訣抄』板行の延宝七年には、宗賢こと未白は五十歳であり、何ら矛盾はないようであるが、一方、『典籍作者便覧』（文化九年序）には、次のように記される。

○高田宗賢

徒然草大全 十三

伊勢物語秘訣抄 十二

○高田白翁

古語拾遺示蒙節解 五

つまり、ここでは、宗賢と未白は別に扱われているのである。さらに、同じく近世後期の著者別目録と言える『近代名家著述目録後編』（天保十三年序）には、

高田宗賢

名宗利 称吉兵衛 平安人

徒然草大全 十

伊勢物語秘訣 四

枕草子鈔 三

とあり、宗賢は京の人となっている。これは備後の人である未白

(白翁・正方)とは異なっており、別人物である可能性が高い。
そして、次の資料で、このことを確認できる。盧驥著『長崎先民伝』巻下「流寓」には、高田宗賢についての記事が載るが、それに左のように記す。

高田宗賢。京師^ノ人也。善^ク國雅^ヲ。而^レ來^リ崎^ノ教授。干^レ時余父^ノ拙^ノ亦^レ從^テ之^ヲ學^ブ焉。

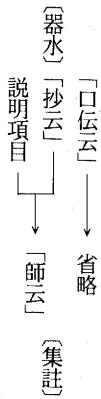
父舛拙も師事したという高田宗賢についてのこの記述は、きわめて信頼できると言ってもよい。「京師^ノ人」であり、「善^ク國雅^ヲ」ということからも、この宗賢が、『秘訣抄』や『徒然草大全』の著者であると思われる。

以上、『秘訣抄』の著者高田宗賢について、従来の宗賢崎門學者説は誤まりであり、高田末白との混同の結果であることを述べた。

三

さて、具体的な検討にはいる前に、『秘訣抄』など三書の関係を考察する上で、従来より注目されている点を見てみたい。それは、諸注を引用する際に、何から引用したのかという、引用の典拠を示す記述であり、中でも注意すべきは、『集註』に「師云」と記されている箇所が、他書で如何に扱われているかということであった。

大津有一氏は、『器水抄』は「集註所引の乗阿の説即ち師云を抄として引用」と述べ、一方、田中宗作氏は左のように記し、



『器水抄』の「口伝云」を『集註』が全て省略しているのは公刊のための措置であり、また、『集註』の「師云」は、『器水抄』では「抄云」か、あるいは単なる「説明項目」(出典を示さないもの)になると言う。

そこで、『器水抄』・『集註』・『秘訣抄』の三書において、『集註』の「師云」の注を中心に、三書ともに注が記載される場合に限って、如何に出典が示されるかについて、改めて詳細に調査を行った(表1参照)。

すると、確かに『集註』の「師云」、即ち一華堂乗阿のものかと思われる説は、『器水抄』では「抄云」か「説明項目」になるが、但し、『器水抄』の巻三途中(二十三段)までは「抄云」と記すのが大勢なのに対し、それ以後は出典を示さない「説明項目」となることが知られる。繁雑さを避けるためだったのか、その理由はよくわからない。

また、『秘訣抄』について言えば、そのほとんどがいわゆる「説明項目」となるが、例えば、『器水抄』巻二「或抄云」↓「秘訣抄」或抄云、「器水抄」巻二「或説云」↓「秘訣抄」或説云、「器水抄」巻二「傳云」↓「秘訣抄」傳云、「器水抄」巻四「一説云」↓「秘訣抄」一説云と、「器水抄」とのかなり正確な対応関係が指摘できる。つまり、『器水抄』と『秘訣抄』との関係は、『集註』には全く見られない口伝が両者には存在することもそうであるが、こうした出典の引用の記述などからも、かなり直接的に近いものが窺えるのである。

『秘訣抄』の、『器水抄』と『集註』との関係、特に『器水抄』との直接的と言ってもさしつかえないほどの関係を改めて確認し、こ

△表 1▽

五	四	三	二	一	卷器 水抄 数
×	一 × 說 × × 云	或抄抄 × × 抄 × 云云	傳傳傳 或或 說抄 × 云云云 云云 (說明項目)	抄抄抄抄抄抄 云云云云云云	器 水 抄
師 云	× 師師師 云云云	私師私師師 云云云云云	師師師師師師師 云云云云云云云	× 師師師 云云云	集 註
×	或一或 說說抄 × = 云云	□或或 × 伝抄抄 × 云云云	□ 傳 或或或或 伝 × 說抄抄說 × × 云云云云云云	或或或 說又抄抄 × × = 云云	秘 訣 抄
16	1 1 1 37	1 1 1 1 4 12	1 1 1 1 1 1 2 6 17	1 1 1 2 2 3	用 例 数

十一	十	九	八	七	六
秘 說 × × × 云	× × × × ×	× × × × × ×	× ×	× × ×	× × ×
師師師師 云云云云	× 師師師師 云云云云	× × 師師師師 云云云云	師師 云云	師師師 云云云	× × 師 云
或或或 說說抄 × 云云云	或或或或 說說說抄 × 云云 = 云	或或又或或 說抄說ハ 云云云云	或抄 × 云	或或說 × 抄說 云に	或或 說抄 × 云云
1 1 4 5	1 1 1 3 14	1 1 1 2 3 14	2 17	1 1 14	1 1 14

れを踏まえて『秘訣抄』について、以後、考察をすすめていきたい。

四

『器水抄』・『集註』・『秘訣抄』が、内容的にそれぞれかなり多く重なり合うことは前述したが、しかし、詳細に見ていくと、各々に取捨する態度があり、如何なる注を取り、如何なる説を欠くかということから、その特徴が窺えると思われる。

例えば、『器水抄』にある口伝を、板本である『集註』が避けたのは、言われる如く、公刊のための措置と思われる。が、逆にそうした口伝を板本でありながら載せた点は、『秘訣抄』の傾向の一つと考えることができる。

このように、具体的に『秘訣抄』を検討してみると、「予が愚意を尠まぢへず先達の諸抄を詞になをすのミ」という『秘訣抄』の序文及び、諸注集成的な注釈書に共通の、先注に対する批判的態度に乏しく、進取的面が少ない、保守的な注（田中氏、前掲書）、という『秘訣抄』に対する従来の評価にはおさまらない、いくつかの傾向が見出される。

右の第一の傾向に続く第二の傾向としてあげられるのは、『器水抄』・『集註』に多く見られる、漢籍・漢文を引用しての注釈が、『秘訣抄』においては随分と減少する点である。例えば十六段で、
年たにもとをとてよつ八へにけるをいくたひ君を頼きぬらん抄云。(器水抄。集註は「師云今こそ。秘訣抄は欠)何事もせずとも四十年の中いくたひか君を女ハ頼つらん者と也下心ハ四十年迄頼ミし男を捨て家出することを刺歌也

愚見抄云君とハ有常か妻を云年月を経て馴しも今ハと別る有常の心中さこそと推量て思ふと也その心あまりてきこゆる也抄云(器水抄。集註は「師云)詩経に婦人を小君といへるハ君子に双ふゆへ也

尚聞云四十年馴たれハそのうち幾度いかばかりか有常を女ハ頼つらんは今立別る女の心中さこそ悲しからんと妻を扶て不義なる事をいはず(註)

と、『秘訣抄』だけは、中間に位置する□部のみを欠いている。このように、『秘訣抄』には、ある章句の注において、他は文章まで同じでありながら、漢籍・漢文の引用のみが削除される場合が非常に多い。

ほいのごとく 愚見抄云女本意なり

(集註「師云)ほいのごとくと云詞ハ大に刺 悪、心也これ春秋の文法也春秋に桓か七年に春「一月」亥焚二成丘云、焚扶云反、火田也識 盡レ物 故書 此焚の字ハ大にそしる詞也 此類也今礼なく私 夫婦となる事を譏たる詞也(器水抄・集註) ほいのごとくとハ愚見抄云女の本意也ほいのごとくと云也ないくゝのねがひのごとくとくあひしと也(秘訣抄) 以上二十三段

もとしそく 舊親族也 (集註「師云)しんを下略してしそくと書たり此詞源氏にもありしたしき人にて他人にてもなきと也 (斎宮の母ハ紀有常が妹業平ハ有常が智なれば一門也其上斎宮に密通して子ある中なれど世を憚てあらハにハいはず只親族といふ也(集註のみ) (集註「師云)親族とハしたしき心也禮記曰親族者謂從七世祖父母已来所有眷屬名親族也(山蒼公

云撰家の一家清花の餘流までを花族と稱之花族各抄ノ点〔秘訣抄のみ〕部を欠く〕
〔百一段〕

同様の例は、四十二段八十箇所に及ぶ。

この傾向は、従来言われているような、童蒙のための著述ということを意識し、注釈をより易しくしようとした、その結果ということも考えられる。しかし、前述したように、『秘訣抄』と『器水抄』との、直接的と言ってもさしつかえないほどの関係を考え合わせる、そこに著者宗賢の、何か別の意図があったものと推察できるように思われる。例えば、前述した三つの例では、『秘訣抄』のみが削除していた注は、『詩経』・『春秋』・『礼記』の引用であった。とすれば、『秘訣抄』が避けたかったのは、こうした漢籍による注に付する儒教道徳的なものだったとは考えられないだろうか。

また、『秘訣抄』における特徴ある傾向の第三としてあげられるのは、段の大意の記述である。『器水抄』・『集註』・『秘訣抄』には、『伊勢物語』の各段において、注釈のはじめに、その段の主意を述べることがある。全体にわたってというわけではないが、これが特に『集註』で意識されていたことは、

此書を講するに先一段くの初に何たる事を書たると覚悟し評判して見るべし
〔集註〕卷十二「雑説」

という一文より明白である。

ところで、『秘訣抄』と『器水抄』・『集註』とは、それぞれ注の大部分が重複し合う、深い関係をもつものであったが、この段の大意についても、それは勿論例外ではない。しかし、具体的に比較検討してみると、段の大意は、それぞれの注釈書の特徴を、明確に示していると思われる。

まず、単純に数のうえで比較してみたい。段の大意が存在するのは、『器水抄』で三十九段と全体の約三分の一、『集註』では六十七段と約半数、『秘訣抄』では十二段と約十分の一である。つまり、この三書における、段の大意の存在の多寡を見てみると、『集註』√『器水抄』√『秘訣抄』、と順次減少することに気付くのである。しかも、段の大意が、『秘訣抄』にあれば必ず他の二書にもあり（十二段）、『器水抄』にあれば『秘訣抄』になくても必ず『集註』にはある（二十七段）、また、段の大意が存在する段には、少なくとも必ず『集註』だけにはある（二十八段）、という状況なのである。

さて、前章において、『秘訣抄』には、特に『器水抄』との直接的と言ってもさしつかえないほどの関係が存在するということを確認した。すると、この段の大意の場合、『器水抄』にあっても『秘訣抄』にないことが多い（二十七段）ということは、『器水抄』に存在した大意を、『秘訣抄』が何らかの意図で削除することが多かったと言えらるのではなからうか。

次に、段の大意における、具体的な記述について触れたい。

師云 此段好色を刺る殊に男ある女にみそか事あるハ曲事也和漢共に刑罰せらるゝ法也獨のミもあらざりけらしと記たるハ大にそしりたる也是孔子の春秋の文法也（集註にのみ存） 〔二段〕

（集註〔師云〕）此段色を好むハ世のならひなれ共義を思ひ人目をはゞかり堪忍するハ本心の人欲におほハれぬ所也知恥近道といふハ是也萬事にわたりて如此つゝしむべし（器水抄・集註に存）

〔八十六段〕

〔秘訣抄〕或抄云〕此段ハ法のことく父母に告て媒ありて嫁娶するハ行末正しき事也その定れる時節をまたずしてよからぬ人のいふことになひく女ハ身軀はふれあらぬさまになるためしをしるして世人の戒とせり(三書とも存) 〔六十一〕段〕

僅かの例しかあげられなかつたが、これだけからも、段の大意の文章に、ある傾向が見えることに気付く。それは、これらが教戒的な言辭であることである。他にも、「此段好色を刺れり」(四段)、「此段ハ男の不義を刺て婦人の貞節を美たり」(十五段)、などといった文章が散見され、段の大意の文章のほとんど全てに、この傾向が見える。

とすれば、こうした段の大意が存在する段の数が、前述の如く、『集註』√『器水抄』√『秘訣抄』というのは、より道徳的な注釈書の順であるとも言えるのではないか。また、『秘訣抄』がこのような文章を意識的に削除したとすれば、教戒性を抑えたかたからとは考えられないだろうか。

それを裏付けるものとして、以下の例をあげたい。『秘訣抄』には、段の大意が存在するものが十二段あることは前述したが、そのうち半数の六段において、『器水抄』や『集註』のものとは文章が改変されているのである。例えば、

抄云(器水抄。集註「師云」。秘訣抄は欠)此段ハ女の好色を刺れり此段に昔といふ字なし書写する人おとしたるか又日比月比なと久き事なれハ比といふ字に昔をもたせたるか古来不審也(秘訣抄のみ波線部欠) 〔十七段〕

心つきて色このミなる男といふ詞此段の小序也此一句好色を刺

たる詞也(秘訣抄のみ波線部「此一句ハ此段の序也」) 〔五十八段〕
の如く、その例の多くに、教戒色をより軽減させるという傾向が窺えるのである。

『秘訣抄』の段の大意におけるこのような態度は、そのみにとどまらず、注全体に及ぶというのが、その特徴ある傾向の第四である。以下に例をあげる。

ぬす人なりけれハ(集註「師云」)此詞大に業平を悪刺たる詞也春秋の文法にて書たり深く罪して盗人と云り……(秘訣抄のみ波線部欠) 〔十二段〕

いささかなることにとハ(集註「師云」)女の心急にして堪忍のなきを大に刺たる詞也(秘訣抄のみ波線部「女のかんにん性なき事也」) 〔二十一〕段〕

おもなくていへるなるへし(集註「師云」)無面目也貞女にて色にうつるふましきと知ながら猶かく歌をやる我しわさのほかなきを恥たるならんと刺て書たり不義なる事を恥る心をたしかにもちたらハ悪念をあらためて君子なるへし(秘訣抄のみ波線部「の心はおもなき也」) 〔三十四段〕

(集註「師云」)あめのしたの色このミのうたにてハ猶そありける此詞大に好色を刺たる詞也上下愁にしつむ折から色めくを云也(秘訣抄のみ波線部「此詞おもしろし」) 〔三十九段〕

このように、『器水抄』・『集註』に見られる教戒的な言辭は、『秘

訣抄』の同じ箇所では、ほとんどが削除・改変されているのである。

以上、『秘訣抄』と『器水抄』や『集註』とを、詳細に比較検討しながら、『秘訣抄』の特徴ある傾向をみてきた。その第一は、従来言われていたように、『集註』に省かれていた口伝を、板本ながら載せたことであった。そして、それに加えて、漢籍・漢文を引用した注が減少する第二の傾向、段の大意が削除・改変される第三の傾向、『秘訣抄』全体において、教戒的な言辞が削除・改変される第四の傾向が窺え、以上のいずれからも、道徳的な教戒色を避けようという、『秘訣抄』の明確な態度が知られたのである。

このことは、更に別の視点からも立証できる。『秘訣抄』の著者高田宗賢に、『徒然草大全』なる、『徒然草』における同様の注釈書があることは既に述べた。その序には、

此抄ハ玄旨公の筆記をうつし侍る其謂所はあるやことなき御方よりつれ／＼草の難義不審の條々尋給ふに玄旨公一々巨細に答給ふ抄出なりひそかに写得てこれを見るにまことに傳聞兼好法師今あひて草紙の難義尋待るにことならずよろこひ身にあまり（註）楽これに過ず（後略）

とあり、幽斎の説を中心に、『寿命院抄』や『野槌』などの諸抄を集成したものと述べる。そして、「一部の大意の事」という項に、幽斎の説として次のように記されている。（註）

問云つれ／＼草の大意ハ儒釈道の中にはいつれをむねとして作れるや 旨云儒釈道あり神道歌道あり故事古実あり恋無常難談あり然とも兼好ハ仏者なればわが得たる方に心よせたりとみるへし儒老莊などは縁にひかれ事によりてすこしきなるもの也（後略）

更にその後には、『徒然草』において、何を主旨にしてそれぞれの段が書かれているかということを列記し、「仏教の段々」を二十六段、「儒道の事有段々」、「神道の段々」、「歌道の段々」をそれぞれ四段ずつあげている。ところが、「儒道」に対してだけは、

百廿九 顔回は人に勞をほとこさし此段も中程に実有の相に着せざると云事あり仏者の名目也

百卅三 天子の御枕させ給ふ所に孔子も東首し給ふとありさのみ儒をとくにあらす

卅五 目をおほふと云のおくに禹のゆきて三苗をせいせしと云事あり始終儒にあらす

七十五 萬の事たのむへからす

右之四段如し此考れとも儒道をとくにてはなき也私云問云四書五経をひかすとも世のため人の為に教戒の端となる事ハ通じて道也道ハ天理也天理を儒と云なれハ皆儒ならんや私答云其ことはりならば仏経神書雜書等も儒書と可謂歟

と、その一つ一つに批判を加えるのである。

『徒然草』を注釈するにあたっては、殊に近世も初期までは、儒仏神（あるいは道）の、おのれの拠る立場でもって説くことが多かった。この『徒然草大全』の態度は、兼好は仏者であるので仏教を旨としたのであろうというもののだが、特に、その儒教的な見方を悉く否定し、強く反発していることが明確に知られるのである。

つまり、『徒然草大全』における宗賢のこうした態度は、『秘訣抄』において、漢籍の引用や段の大意を削除し、教戒的言辞を改変したものと同一なのであって、ここで改めて、儒教・道徳的、教戒的な立

場で古典を読むことを否定する、宗賢の基本的姿勢が明らかになるのである。また、こうしたことから、『秘訣抄』及び『徒然草大全』の著者高田宗賢が、崎門の高田未白ではありえないことも、逆に証明できるのではあるまいか。

五

『伊勢物語集註』は、切臨が自らの師である乘阿の説を中心に編んだものであるが、その『伊勢物語』享受の態度については、

師云此物語ハ大率好色を面に書シハ人の好む事を以て道に引入ん為也(中略)此書も色このむ事をいへども下の意ハ仏教儒教と同じ事也(中略)好色を記すハ禁ん為也無為の極楽を願ものに五欲を満足するハ浄土也とをしゆるは五欲をはなれしめんの方便なるがごとし
〔集註〕卷十二「大意」

此物語にて道のおこなひやうをよく覚悟して其上に相傳の一まきを見て常に工夫し道を明にせる師に對して心より心に傳て發明せバ生前死後天地万物の上に不審あることなく天眼通を得て諸神諸仏に面對する事仏儒の教理を習はずしてやまと詞を以しりあきらむることありかたきをしへ也このゆへに歌道ハ諸道といふ也
〔集註〕卷十二「雜説」

と説くように、物語を道を説くためのものと考え、道徳的な文学観であった。これは近世初期に特徴的な態度であり、また、「集註」という題名も、「四書集注」を意識した、そうした態度より生まれたものに相違ない。

こうした『集註』あるいは『器水抄』に対して、材料を同じくして成った『秘訣抄』は、これら先行の二書とは、『伊勢物語』享受の態度を、根本的なところで異にしていると思われる。このことは、前章で述べたように、教戒性を抑えるための、先行の文章の削除や改変といった特徴から、十分に理解できるが、そればかりではない。『秘訣抄』には、批判的態度に乏しいどころか、『器水抄』などの注に、真正面から反論することまであるからである。(以下の例で、いずれも前半は『器水抄』・『集註』・『秘訣抄』に共通するもの、後半の□部分は『秘訣抄』のみに付加されたもの。)

〔集註〕師云。秘訣抄「或説云」かゝる事とハ恋をいふ高もいやしきも好色の道ハ身ほろほし家のみたり天下国家の一大事にて万民のくるしミとなる事そと歌にハあれとも作者が猶又恋に詞を加てふかく戒たり

右のかゝる事といふよりすへまでの抄ハ此所に不叶誤也尊をおもひいやしきをすつるハむかしも今も世のことわりといふ事也世のことはりと云を世のならわせとかるくみるへし好色を戒たりと云にはあらず好色ハ尊もいやしきもかハラぬといふ事也
〔九十三段〕

〔集註〕師云。秘訣抄「或説云」こゝろさしはいやまさりとハ女の節義の正しきを感じて深切に思ふ事いよくまさると也源氏君空蟬と云女の貞義よからね共貞節なるを感じて一生大切にせられしに似たり

右之説非也節義あるを以て心ざしのいやましなるにハあらずにくげなれどもしたふを恋の情といふもの也

今出川近衛が歌拾遺集に入

うらみても猶したふ哉恋しさのつらさにまくるならひなければ
此歌の心也源氏の空蟬の事も節義あるを以て光君の心よせ給ふ
にハあらず光君の本性は心づくしなる事におぼしむむるくせ
なんあると箒木にみえたりあやまるべからず

〔百五段〕

〔集註「師云。秘訣抄「或抄云」此段ハ業平かりそめに二条
后に思ひをかけてそのはつかなるが種となり物思ひに身くつお
れ京にあられじてあづまのはてまてはふれありくゆへに万事始
を少の事をもつしめといふ心に書り

右之抄あやまり也此物語は好色を戒んために非す又すゝむるに
あらず詠歌述作のために伊勢がつくりたる物なればありのまゝ
に見るへし底意を用へからず

〔百十六段〕

ここで宗賢が強調しているのは、まず、『伊勢物語』は好色を戒め
るといった、道を説くためのものでは決してないことであつた。ま
た、「にくげなれどもしたふを恋の情といふもの也」と、一見、宣長
のもののはれの説に通じるかのような見解すら見えている。そし
て、『伊勢物語』は「詠歌述作のため」のもの、と規定するのである。

抑此物語の宗とさす所は歌道なるへし定家卿を始とし代々の歌
人此物語を詠歌のために用ひ給へり又定家も歌道と見給へる證
拠は可_レ詠詞花言葉_一といへり此心ハ歌を詠する良材にして述
作のたよりにみよとの教也（巻一「伊勢物語題号_并作者ノ事」）

又此物語ハ恋を以て恋をやめさせたりといひ又云こひを以て道
に引入ん為也_云これ此物語を歌書と見ずしてよの事になす故也

物語一部全篇を見るへし恋をすゝむる詞もなく又戒むる心もな
きなり唯定家の見給へるごとくに歌道の述作の便に見るを正見
とすへし

〔同前〕

これらも、全く同じ理解を示している。

『秘訣抄』の著者高田宗賢にとつて、『伊勢物語』はすぐれた和歌
を詠むためのものだった——これは従来と同じである。ただ明らか
に異なるのは、道徳的なものに束縛されない文字観であつた。

六

『秘訣抄』とはぼ同時期に出板された『伊勢物語』の注釈書に、
北村季吟の『伊勢物語拾穂抄』がある。その跋文から、成立は寛文
三年以前とされるが、板行は延宝八年、『秘訣抄』の翌年である。こ
の季吟の『拾穂抄』は、永い間大きな影響を与えた、いわば『闕疑
抄』に続く、旧注における最も正統的な注釈書と言える。そこで、
最後に一例をあげて、『拾穂抄』と『秘訣抄』とを比較してみたい。
取りあげたのは四十九段で、従来より、兄妹の恋愛とみるか否か
で解釈の分かれるところである。例えば、当時最も正統的な『拾穂
抄』は、

玄常には業平の妹を懸想してよむといへどしからず妹を不便に

思ひて憐愍にていへる也（中略）彼物がたり（源氏、総角；引
用者注）にてハ態好色に用ひなしたるもかへりて面白く侍にや
此物語にてハさやうにハ心得まじき也是_一一条の和歌の心ばへ
にて侍にや詩三百篇も男女の事もちて政道のたすけとしたる
事おほし源氏伊勢物語も其心にて見る事歌道の習ひにて侍り

と、『闕疑抄』の説を踏襲し、憐愍であつて恋愛ではないと述べる。これに対し、契沖『勢語臆断』では、

すこしけさうして此歌をよまれたるなり。下になりひらの事を、ひとつ子にさへありければとあれば別の腹の妹にや。(中略) 異腹の妹などは后にたゝせたまへる事も其例おほければ、昔はくるしからぬ故ありければこそしかりけめ。此事内典外典によりていへば、おぼつかかなからぬにしもあらねど、本朝は神道を本とす。然るに神代より有ける事なれば、みだりに議すべからず、後に嫌はしき事となれるをもて、昔を難すべからず。又昔をもて後の例とすへき事にもあらず。或抄にしひて業平をたすけて、けさうにはあらずといへと、さらば齋宮一條后(注)などの事はいかにとかおもへる。たゝありのままにさて有なん。

と説かれる。つまり、異腹の兄妹という合理的な解釈と、それに加えて、古典は古典の時代においてありのままに見るべきで、後の道徳観や価値観でもって、批難したり規範としたりするには当たらないという理解が見える。新注とするゆえんである。

こうした解釈の中で、『秘訣抄』はどう位置づけられるのか。やはり、『器水抄』・『集註』と比較して検討したい(表2)参照。

まず、本稿でこれまで述べてきたように、『集註』のみが口伝の部分を欠いていること、『秘訣抄』のみが漢籍の引用、その他の教戒的な言辞を欠くことが指摘できる。例えば、『秘訣抄』のみに見えない『枕網経』の引用には、

といふも兄弟の姉する事を戒たりかやうのいさめを成さん為也。
(『集註』に)書たる者也女子などをはいかにもよくはくむへき事と云義也

という一文が付きされているのである。

また、『集註』が特に教戒性に徹していること、そして、『器水抄』と『秘訣抄』が同じように口伝——この段を憐愍とみる説、恋慕とする説、虚段という説——をあげながらも、『器水抄』が他はほぼ『集註』と同一で、教戒的言辞が散見できるのに対し、『秘訣抄』がこうした道徳的読みを、意識して削除していることが知られる。この点、「政道のたすけ」と述べる『拾穂抄』とは全く異なる。

そして、ここで最も注目されるのは、『秘訣抄』にのみ末尾に付される一文である。つまり、業平が妹を憐愍したという説を否定し、ありのままに恋愛とみることに、これは契沖とも共通する理解である。ところが、『秘訣抄』が契沖と異なるのは、これは「虚」であつて、だから憚ることはいらないという態度であつた。その虚の説というのは、確かに『器水抄』に口伝として載るものではあるが、『秘訣抄』は右に述べた独自の一文を付するなどこれを徹底させており、しかも板行に及んだのである。

以上のように見てくると、『秘訣抄』は、先人の注を批判することが少なく保守的だという従来の評価とは全く逆で、当時の最も正統的な『拾穂抄』はもとより、後年の契沖よりも進んでいると言える解釈をすることもある、興味深い注釈書と言えるのではなからうか。

七

本稿ではこれまで、『秘訣抄』と、それと直接的と言つてもさしつかえないほどの関係と思われる『器水抄』や『集註』とを比較検討

器 水 抄 集 註 秘 訣 抄

口傳云此段にも三重の奥義あり一重ハ諸抄に記所の趣業平妹に憐愍の心也恋にハあらずと云説二重にハ恋慕の心なりとみる其故ハ物語の文章をまげずしてありのまゝに見れハ恋の心明也業平妹に恋慕し給へると云ハあまりなるやうに覚ゆれハ摺て憐愍といふ也紫式部も此所を恋慕とみたれハこそ源氏角縁に引たる心も恋慕也其證文ハ次に記す三重ハ此物語ハ虚実相交てかきたれハ傳受の人ならでハ此所すみにくきもの也此段第一にむつかしき心得有所也傳受する人も稀也抑此所ハ虚段也業平妹に恋慕の心決定してなき事也世上の思ひかけもなき事なれハしるしたる也これ作物語なれハ也若しさゝかも其氣ざし実には有ハかきしるすまじき子細をよく工夫すべし決してなき事なる故にかきし也かやうにみるを虚を虚にみる口傳といふ也しかるを習しらぬ人ハ実名ある所を実と思ひ又名もさだかならず虚説と見ゆる所を虚と思へりさにハあらず虚段とみゆる所ハ却て実也これ傳受の事也まつ一重の通りの説にハ此段ハ妹をめくみ兄を敬ことを書り兄妹ハ五倫の一なりといへり是表の説なり

(愚見抄、惟清抄、金葉集、源氏) 源氏に書たるもあしき事を例にして悪をするを戒ん為也非義を義とするハ小人也 (孟子、闕疑抄、梵網經、愚見抄、九禪抄)

×

(真名本)

師云此段は妹をめくみ兄を敬ことを書り兄弟ハ五倫の一なり

(愚見抄)

○(同シ)

此虚実の習をしらでは習する

口傳

右源氏の心も業平妹に恋慕の心あるよしにて紫式部もかきたり然ハ妹憐愍とみるはまげたる説なるへし有のまゝに見て置へしとかく虚の段とみるからハ何事も憚有べからず

しながら、『秘訣抄』の特徴・傾向について考察してきた。その結果、先行する『器水抄』・『集註』の注の削除・改変・批判等に見出される傾向から、『秘訣抄』なる注釈書は、『伊勢物語』を和歌実作のために読むという伝統的な態度を保持しつつ、それに加えて、物語を虚構と捉え、しかも道徳的な文学観に対して自由な態度を有するということなどを、具体的に明らかにすることができた。こうした『秘訣抄』の特徴は、同時期の正統的な注釈書からはなかなか窺えない、『秘訣抄』の注目に価する点だと言える。

中村幸彦氏は『伊勢物語と近世文学』（『中村幸彦著述集第三巻』所収）において、近世における『伊勢物語』の享受に次の三通りをあげる。

一、近世前期の知識人において、全くは古典視せず、和歌実作の規範とするなど現実的生命を持ったものとして読む場合。また、この物語には事実が含まれると考え、人倫に益するものがあると考え。

二、近世後期の国学において、全くの古典として、当代の文学と一線を劃して考える場合。作り物語とする考えを持つ。

三、教養の低い人々に多い立場で、『伊勢物語』の本文に直に接することがなく、『昔男』即ち業平のこととして伝説となつたことの理解によって、この物語に対する態度。

そして、本稿に取りあげた『秘訣抄』について中村氏は、本稿三十六頁下段の引用「物語」部全篇を見るべし……」を引きながら、一と二の中間の、僅かにある過渡的な見方であると触れている。

さて、『伊勢物語』の享受史を踏まえつつ、『昔男時世敷』（享保十六年刊）なる浮世草子調の俗解本に注目したのが、日野龍夫氏（国

学以前の古典享受）（『宣長と秋成』昭59・10）であった。日野氏は、こうした「民間通俗レベル」の側のものに、幽齋・貞徳・季吟などの正統的な和学者の業績だけからは捉えられない、宣長に近い態度が窺えることを立証した。

しかし、日野氏が取りあげた問題は、そっくりそのまま『秘訣抄』にも当てはまるのではあるまいか。否、むしろ、延宝期という時期といい、注釈書という形態といい、『秘訣抄』はよりふさわしいものと思われる。なぜならば、『秘訣抄』は、まさしく近世初期の古典享受と国学におけるそれとを繋ぐ線上の、その中間に位置するものだからである。そして、前述したような、『秘訣抄』における虚構の意識、文学を道徳から解放する態度などからは、既に、近世初期における道徳的な文学観からの乖離と、それゆえに国学へと通じる文学観とが窺えると言える。

とすれば、中村幸彦氏の『秘訣抄』に対する、一（近世初期の享受）と二（国学における享受）との「過渡的な見方」という評価も、聊か再考の余地があるのではないか。すなわち、『秘訣抄』は単に「過渡的」と言うだけではすまずことのできない、この時代としてはきわめて評価できる文学観をもつと思われるのである。

『秘訣抄』に、一見、宣長のもののはれの説に通じるかのような見解が見えることは前述した。ここで直接的な影響関係を言うつもりは全くないが、宣長の『寶曆二年以後購求臆寫書籍附書目』^{註11}には、『秘訣抄』の書名が二箇所に見える。果たして、宣長は読んでいたであろうか。

この『秘訣抄』の板行された約十年後、時代が元禄期に入ると、文学は人情を道うものであるという文学思潮がおこるといふ（中村

幸彦氏「文学は『人情を道ふ』の説」、『中村幸彦著述集第一巻』所収。さすれば、『秘訣抄』は、元禄期をやがて迎えようという延宝期の文学思潮の姿を、『伊勢物語』注釈という限られた範囲内においてではあるが、それゆえにかえて具体的に表わす一書であったと言えよう。

註

- 1 引用は九州大学附属図書館蔵本に拠る。九大本は「延寶七年」末九月「一日／中野太郎左衛門板行」という刊記を有する。大津氏や田中氏によれば、書肆名を「書林業師構蔵版」とする本も存するが、未見。
- 2 箱書に「烏丸光広卿筆」とあるものの、大津有一氏は、跋文の記述などから、光広の著述でも書写でもないとし、田中宗作氏もそれに従っている。
- 3 『浮海』については、近時、入口敦志氏『伊勢物語浮海』の位置——段の大意を中心として——（『語文研究』64、昭62・12）がある。
- 4 大津氏・田中氏前掲書、及び註3参照。
- 5 大津氏前掲書によれば、一華堂葉阿に関係が深いと思われ、『集註』との関わりも指摘されるものに、『伊勢物語新註』がある。『新註』は、写本で大本三冊、大東急記念文庫所蔵。上巻末に「右伊勢物語新註古人之説く古來諸我師一花堂葉阿翁之相傳方々集合本説全部為三卷者也」とあり、『集註』と同じく、葉阿の説を門人がまとめたものと思われる。内容が『集註』にほぼ重なるが、以下相違する点をあげる。まず、いわゆる段の大意がほとんど段末に位置すること。また、『新註』のみに文章が付加される例も数は少ないがある。例えば、
業平も此段ノ一念ヲ種として一生好色ニ而万代迄不儀の名を残せり是をしらしめ後人ノ悪心をひるかへさん教ニ書ける段也
（一段）
というのもこの一例で、『集註』より教戒性が高くなっているとも言える。詳細については後に期したい。

6 『近世著述目録集成』（昭53・12）。

7 註6参照。

8 『集註』の引用は、九州大学附属図書館蔵本に拠る。但し、九大本は、「承應 癸巳年三月吉日／室町通鯉山町／梓行小嶋彌左衛門」という刊記をもつ後印本。

9 引用は九州大学附属図書館蔵本に拠る。但し、九大本の刊記は「延寶五年／丁巳九月吉日」とあるのみで、書肆名のない後印本。

10 富倉徳次郎氏は前掲書において、『徒然草大全』について次のように述べる。

言う所は穩健であるが、もし幽斎がこうした考察を徒然草に対して下していたとしたら、それは時代的に見て、あまりに行きとどいた考察である。おそらくは、高田宗賢が女巨説を發展せしめたものであり、その意味で、延宝期の一つの徒然草観として見るべきものと思うのである。

11 一華堂葉阿の文学観について、小高敏郎氏は「一華堂葉阿・切臨の学統」（『近世初期文壇の研究』所収、昭39・11）において、以下のように言う。

すなわち、その学問観は、文学とは芸術的な美をもとめるといふ唯美的文学観ではなく、正しい生き方を求めるためのものとする、道的な、倫理的な文学観であった。またその学問方法は、網羅集成的で、実証的な手がたさを備えてはいるが、師説を尊重し、時に言目的にこれを信ずる傾きがある。

12 日野龍天氏は「国学以前の古典享受」（前出）において、『昔男時世妝』の四十九段で、同腹の兄妹の全き恋愛という、契沖をも超える解釈がされていることに注目し、道德的解釈から自由な、こうした民間通俗レベルのものに、宣長に通じる態度が見出されると述べた。

13 『契沖全集第九巻』（昭49・4）。

14 『本居宣長全集第二十巻』（昭50・8）。

（付記） 本稿を成すに当たって、貴重な蔵書の閲覧・複写を快諾された関係諸機関に対し、心より御礼申し上げます。